
おまえなんかだいきらいだ!

mirai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまえなんかだいきらいだ！

【Nコード】

N1335BA

【作者名】

mirai

【あらすじ】

何故俺の家に俺の大嫌いな生徒会長だいるんだ！？

ブログ

ピンポーン

寒い冬、12月。

こたつに潜りこみながら、お気に入りのアクションゲームをしていた俺、

鴻上 京は、チャイムの音に小さく舌打ちをした。

どうせ代わりに出てくれる奴なんていないし

俺に家族はいない。両親は幼いころ交通事故で亡くした。

中学卒業までは、親戚の家で預かってもらっていたが

高校入学をいい機会に独り立ちをしたのだ。

両親も俺に財産を残してくれたし、金に困ることはなかった。

いろいろ慣れないこともあったが、俺と同じように独り暮らしをする

友人にも助けてもらって、何かと充実している。

もうこの暮らしを始めて3年たった。

そんな俺の唯一の苦手なヤツ。

それは、俺の通っている高校の生徒会長…。

名前を保科 翔。成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群。

なんでも揃っている、いわば”完璧”というやつだ。

こんなやつだから、女子人気も相当に高い。

別にそれが気に入らないわけではない。

何故かわからないが、何かと俺につつかかってくるのだ

めんどくせーな…

億劫に思いながら、こたつを半ば這いずるようにして出て、

眠い目をこすりながら、ドアを開けた。

するとそこには眠気を吹き飛ばすようなものがあつた。

というより居た、というほうが正確か。

何故…

何故俺の家に俺の大嫌いな生徒会長がいるんだ…っ!?

なんでおまえがいるんだ！？

何故だ……………

俺がただ愕然として突っ立っていると

ふいに声をかけられた。

「急に邪魔して悪かった」

その声で現実に取り戻された俺は、声が裏返っていた。

「なんでお前がここにいるんだっ！！」

保科を睨みつけながら言った。

「…いちゃ悪いのか」

「うつ…」

言葉に詰まる。確かにこいつがここにいて何か悪いということはない。

ただ、こいつが何故ここにいいのかただその疑念が渦となって頭の中を駆け巡った。

「何故俺がここにいるのか…理由を知りたいんだろう」

保科の黒縁メガネの奥の眸が光った。

「…なんなんだよ」

少しふてくされながら尋ねた。

「お前に…告白しに来た」

は…？

こいつ、何を言っているんだ。一瞬幻聴かと思った。

そこで、夢が現か確かめるため自分のほほを強くつねった。

痛い。ちょっと強すぎた。

…夢じゃねーのか

ではいったいどういうことなんだろうか。

まてよ…告白といっても”愛”の告白かどうかなんてわからないじゃないか。

そうだ。そんなのまだわからない。確かめればいい。

「告白…ってどういうこと…？」

恐る恐る尋ねる。

「お前：バカなんだな」

驚愕の次に怒りの感情がふつふつと湧き上がる。

「バカなんだな…って普通言つか！？そりやお前より断然に頭は悪いかもしれねーけど？」

今言うことないだろ！！！？」

怒りを露わにし、半ば怒鳴るように言った。

「今…改めて実感した」

この男は…っ！！！！

俺が次の罵声を浴びせかけようとしたとき、

「本題にもどっていいか」

と保科の落ち着いた声が聞こえた。

まだ怒りは収まっていなかったが、話だけでも聞くことにした。

「…１０分」

それが話ができる猶予期間だ。

「わかった。手短に話す…」

ここで保科は大きく息を吸った。

「…お前のが好きだ」

急な告白

うそ…だろ？

そんな訳ない。保科は俺に突っかかってきて…

俺のこと嫌いなはず…？なのに何で…っ？

頭の中が混乱していた。そのまま俺はへなへなと座り込んでしまった。

「そんなにシヨックだったか」

保科の声が少し落ち込んでるようにも聞こえた。

「シヨックっつーか…なんっつーか…」

髪をくしゃくしゃにしながら曖昧な返事を返した。

すると、保科がしゃがみ俺に視線を合わせてきた。

不覚にも、保科の整った顔立ちにドキッとしてしまう。

「っ／／／」

「お前は…俺のことどう思ってる…？」

急に返答を求められてもなんとやっていいかわからなかった。

「んなこと言われても…っ／＼／」

つい目線を逸らしてしまった。

「…わかった」

その言葉と同時に、保科は立ち上がり玄関の方へ体を向けた。

「いつでもいい…。返事待ってるから。急に邪魔して悪かった。じゃあな」

そう言い残して足早に出て行ってしまった。

一体…なんだったんだ…。

揺れ動く気持ち

あの嵐のような出来事の後、俺はずっと考えていた。

俺は保科のことをどう思っているのか…

答えはすぐに出た。”嫌い”という感情だった。

もしかすると、嫌いなのではなく、苦手なだけかもしれない。

しかし、よい感情を持っていないのは確かだった。

確かに入学当初は、男子でもドキッとするほどかつこい保科に好感はもっていた。

そもそも、なぜ急に今なんだろう？

思い立ったように俺の家に来るなんて。

保科は頭こそいいが、どこか抜けているところもある。

夜11時近くに他人の家にやってきて告白するだなんて…。

少しおかしい。そう思い返して、笑いが込み上げてきた。

「ぷっ…保科ってやっぱりおもしれーな…」

その時、はつとした。あれからずっと保科のことを考えてる。

嫌いなヤツならすぐフればよかった。なのにあの時俺はそう答えをださなかった。

「俺は…」

あいつのことが…好きなのか…っ／＼／

何で…わからない。急に心臓がドキドキし始めた。

保科は、俺にいろいろちよっかいを出してくる…。

だけど…心底嫌悪感を催すようなものはなかった。

うざいぐらいにしか思ったことはない…それにあいつは俺の世話も焼いてくれた。

ノートを忘れたとき何も言わずに写さしてくれたのは、誰だったか？

授業で指名されたとき隣でこっそり耳打ちしてくれたのは…？

担任に教科書運びを手伝わされた時、何気なく一緒にやってくれていたのは…？

全部、全部…保科だった…っ。

急に保科への感謝の気持ちが込み上がってきた。

確かに嫌味はいうかもしれない。だけどそれ以上に保科は俺のために尽くしてくれた。

保科の存在をこんなにも近くに感じた。

「保科…っ」

そのまま俺はコートを引っ掴み、夜の街へと飛び出していた。

あいつの家に

「ハアっ…ハアっ…確か…この辺だったよなっ…」

息も絶え絶え、わずかな記憶を頼りに保科の家を探した。

寒い12月の夜道を走ってきたせい、手の感覚がない。

「さみいつ…」

コートの中の防寒具はこの気温ではキツかった。

まだ保科の家も見つかっていない。

今日はもう帰ろう…。そう思っていたとき、

道の向こう側から見慣れた人影がやってきた。

保科だった。どうやらコンビニに行っていたらしい。

保科も俺と同じ独り暮らしだから、夜食でも買いに行ったのだろうか。

向こうも俺に気付いたらしい。小走りに近づいてきた。

「…どうしてここに？」

保科は開口一番にそう尋ねてきた。

「返事を…っ返しに来た…っ」

まだ息が上がっている俺は、切れ切れに言った。

「えっ…?」

「俺…っ」

そこで俺はとんでもない行動に出た。

自分でも信じられなかった。こんな大胆なことをするだなんて。

俺よりも少し背の高い保科の唇に、自分の唇を重ねて

「んっ…俺、お前のこと好きだっ／＼／」

「っ／／／／／／／」

保科はそのまま少し呆然としていた。

無言の空気に耐え切れなくなり、俺は

「さみいな…何かお茶でもだしてくんねーかな…／／／」

少し照れながら言った。

すると、その一言で意識が戻ったのか、保科が

「…っああ、そうだな。行こうか」

と半ばうわの空で答え、そのまま保科の家へ向かった。

新しい関係

「・・・あ、入って」

保科は、まだ先ほどの出来事が信じられなかったのか、どこを見ているのかわからないような表情で

俺を自宅へ招き入れてくれた。

「急に来て悪かったな・・・」

「・・・い、いや大丈夫だ・・・」

また返答が遅れた。

それが面白くて、俺はまた苦笑してしまった。

「ふっ・・・」

「なっ・・・何が可笑しい・・・？」

「いやー、お前おもしれーなと思ってさ・・・俺にキスされてから上の空だぜ？」

そう言つと保科は真っ赤になった。

「っ／／／」

それから、保科に告白すると決めてからから思っていたことを口にした。

「あ、あのさ・・・俺たちって付き合うのか・・・な／／／」

「えっ／／／」

「あ、いやちょっと気になったけなんだけど・・・お前は・・・？」

「・・・俺はお前さえよければ・・・と／／／」

少しは予想していたが、本当に保科と付き合うなんて

昨日までは考えつかなかっただろう。

「そ、そうなの・・・か／／／じゃあ・・・これからよろしく・・・／／／」

「っ／／／あ、ああ。よろしく・・・」

それから俺たちの新しい関係がスタートした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1335ba/>

おまえなんかだいきらいだ!

2012年1月8日20時45分発行